

伊藤亜紗さんに聞く



いとう あさ
1979年、東京都生まれ
美学者
東京工業大学科学技術創成研究院未来の人類研究センター長
リベラルアーツ研究教育院准教授
東京大学大学院人文社会系研究科美学芸術学専門分野博士課程修了
博士（文学）、専門は美学、現代アート
主な著作に『ヴァレリーの芸術哲学、あるいは身体の解剖』（水声社、2013年）
『どもる体』（医学書院、2018年）
『記憶する体』（サントリー学芸賞、春秋社、2019年）、
『目の見えない人は世界をどう見ているのか』（光文社新書、2015年）
『ちくまQ ブックス きみの体は何者か』（筑摩書房、2021年）
『手の倫理』（講談社選書メチエ、2020年）
『体はゆく』（文藝春秋、2022年）など

実社会は、

超絶総合ゲーム

学校評価を相対化させ、ゆたかな時間を

聞き手

菅間正道（自由の森学園高校・校長）

●保護者が紹介してくれた
『どもる体』

菅間 伊藤さんには、九月の中旬におこなわれた、自由の森学園高校の進路教育イベント「学ぶ・働く・生きる」において、講師の一人としてお越しいただきました。伊藤さんの会場教室には、生徒たちがたくさん参加して、前のめりで真剣に話を聞いていました。お話しされてみていかがでしたか。

伊藤 まず、教室の最前列、一番前に私の知り合いの娘さんがいて、すごくびっくりしました（笑）。全体的にはみなさん、言葉にすることがとても上手だなというのが印象的で、私の専門は美学なんですけれども、その力をすごく持ってらっしゃる感じでしたね。ある生徒がこういう質問をしてきたんです。

「自分は受験勉強みたいなものやってみた。それまでは、自分はそのな根を詰めて勉強したことがなかった。で、勉強してみたらなんか体が痙攣する感じがする」って言っていて、それって普通病気みたいな感じですが、なんかニュートラルに、一つの現象として、自

分で面白がっている語り方をされているのが新鮮でした。講座の担当の先生が体育の方で、その先生が「自分の体を観察することは、いつも普通にやっていることなので、特別なことではありません」っていう風におっしゃっていたのも印象に残っています。

菅間 本学園では体育を文字通り「からだ育て」と捉えているので、体育科の若手教師を講座担当に配置しました。その彼も終わってから「すごく面白かったです！勉強になりました」って感想を伝えてくれました。

さて、僕が伊藤さんを知るきっかけとなったのは『どもる体』でした。正確に言うと、その本に出ている、在日コリアンのチョン・ヒョナンさんが、「伊藤亜紗さんって知ってますか」って僕に教えてくれたんです。チョンさんは自由の森学園の保護者で——その生徒はもう卒業しましたが——在学中にはとてもお世話になりました。ちなみに、チョンさんと伊藤さんの出会いはどんな感じだったんですか。

伊藤 東大の駒場でおこなわれた、こまば当事者カレッジというイベントが一番最初でした。その講師の一人が私だったんです。チョンさんはそこに参加者／当事者として関わられていて、彼の話を聞いたら、めちゃくちゃ